掃除当番

槇本楠郎

青空文庫

びつくりするほど冷たい井戸水を、ザブ〳〵と二つのバケツに一ぱい汲むと、元気な槇君はそれを両手にさげて、廊下から階段を登つて、トツトと自分の教室へ帰つて来ました。

すると、だしぬけに、四五人の掃除当番の者が、口々にかう叫びました。

「おい君、五年生のやつらが、僕たちのぞうきんを持つてつちやつたぞ！」

「おれ、ほうきで追つかけたんだが、どうしても返さないんだ――」

「三人はいつて来て、だまつて探してゐたが、『おう、たくさんあるな、一枚かりてくよ』つて、持つてつちやつたんだよ！」

「上級生だつて、なまいきだ！　ねえ槇君、おれたちも、しかへしに、何か、かつぱらひに行かう！　ごみとりだつて、ほうきだつて、あいつらの帽子だつていゝぢやないか！　かうなれア非常時だ――」

「アツハ、『非常時』はすげエや。非常時日本……いや、非常時四男組だア……」

みんなワイ〳〵騒ぎ出しました。だまつて窓ガラスを拭いてゐた、女のやうなおとなしい水村君も、窓からおりて来ました。

「ぞうきんは、これつきりだね？」

槇君はさう云ひながら、落着いて、残つてゐるぞうきんを、床の上に並べて見ました。四つあります。けれど、みんなボロ〳〵で、中には半分ぐらゐしかないのもあります。

「これぢや駄目だね。」と、槇君は呟(つぶや)きました。「よし、僕が取り返しに行く。こんなぞうきんばかりで拭けるもんか。みんなも、ついて来てくれ。だが、乱暴しちや駄目だぞ。」

「おれ、ほうきもつてかうか?」

「よせ〳〵!」と、誰(だれ)かゞ止めました。

「そんなら、ぞうきんならいゝだらう? おれ、こいつで、五年生のやつらの、顔をふいてやるんだ。イザつていふ時にな。」

「さうだア、おれもさうしよう!」

背の高い、当番長の槇君は、サツサと出て行きました。

その後へ、四人つゞきました。少し遅れて、また二人、まだ滴(しづく)のたれるボロぞうきんをさげて、追ひつきました。

すぐ隣の教室は、四年女子組の教室で、その次が五年男子組の教室です。

槇君を先頭にする四年男子組の子供たちは、いつもなら、女子組の掃除当番にからかつたりするのですが、今日は見向きもしないで、ドヤ〳〵と五年男子組の教室へ、おしかけて行きました。

槇君は、先生の出入口の方から入つて行くと、いきなり、かう云ひました。

「おい、ぞうきんは僕の方でもいるんだ。返してくれ給(たま)へ。」

すると、騒ぎながら掃除してゐた五年男子組の子供たちは、一度に立ち止まりました。そし

てポカンと振り向きました。四年生にしてはバカにノツポのやつを先頭に、ズラリと六人並んでゐるのです。ビリつこの二人のさげてゐるボロぞうきんからは、ポタ〳〵と水がたれてゐます。

「ぞうきんを返し給へ。君たちは、僕たちのぞうきんを盗んだんだ。盗むなんて、よくないぢやないか。返してくれ給へ。」

槇君がかう云ふと、

「盗みはしないよ。」と、教室の隅つこの一人が叫びました。

「さうよ。泥棒なんかするもんか！」と、また一人叫びました。

「証拠があるか？」

「証拠を出せ！」

みんなてんでに叫びながら、五年男子組の方も、一つところへ、かたまつてしまひました。

「証拠か？」と、槇君は少し腹を立てゝ、前へ一歩踏み出して、叫びました。

「証拠なら、いくらでもある。僕たちみんなが見てるんだ。ぞうきんだつて、見覚えがあるんだ。——いつたい、君の方の当番長は誰です？」

「おれだ。」

よく肥えた、眼のクル〳〵した、おどけた恰好の男の子が突つ立ちました。

「ぢや、君は、当番長でも、盗んだぞうきんを、返さなくつてもいゝと思つてるんですか？」

すると、当番長は眼をクル〳〵させて、きまり悪さうにニヤツと笑ひました。そこで他の者が、かう叫びました。

「盗みはしないよ！」

「うそオつけエ！」と、ぞうきんをさげて来た一番小さい北川君が、だしぬけに叫びました。それと一しよに、ぞうきんからタラ〳〵と水が流れました。覚えずぞうきんを握りしめたからです。

「盗んだんぢやない、借りて来たんだ。」と、また向ふの一人が叫び返しました。

「借りたんなら、なほさら返してもらはう。返してくれ給へ。」と、すかさず、槇君が突つこみました。

「さうだ〳〵。返せ〳〵。」と、小さい北川君が、いたづらツ子らしく叫びました。

「こらツ、チビ！　そこは掃除してあるんだぞ。ボロぞうきんに小便させちや困るぢやねえか！　出ろ〳〵！」

「出るもんかア、ぞうきんを取り返さなくちや。——こつちは『非常時』だぞ！」

みんな吹き出してしまひました。

「ようし、ぢや、返してやる。」

五年当番長がさう云ふと、すぐ一人が、

「だつて、僕らの方でも取られたんだよ。六年のやつらに。」と云ひました。

「さうよ。さつきね、二三人とんで来て、『おい、ちよつとぞうきんを貸してくれ。君の方はまだ使つてないんだらう？　ぢや、一枚借りて行くよ』つて、持つてつちやつたんだ。こつちにもいるんで、さつき返してもらひに行つたんだ。するとね、六年のやつらはね、『借りはしないよ』とか、『もう返した』とか、『ケチ〳〵云ふな。おれの方がすんだら、おまいの方へ手伝ひに行つてやるよ』なんて云つてね、どうしても返してくれないんだ。だから……だからさ……」

「さうよ。で、僕たちも困つて、四年生のを借りに行つたんだ。」

槇君はだまつて聞いてゐましたが、この時コト〳〵と、五年生の方へ近づいて行きました。そして親しさうに、かう云ひました。

「ぢや、みんなで、かうしようぢやないか？　僕たちのぞうきんは、僕たちがもらつて行くことにして、その代り、君たちのぞうきんも、今すぐ、もらつて来ることにしようぢやないか？　君たちと僕たちとで、みんな一しよになつて行けば、きつと、六年生だつて返すにちがひない。ねえ君たち、すぐ行かうぢやないか？」

これには五年生たちも、すつかり機嫌をなほしました。すぐ、「行かう〳〵！」と云ふ者が二三人ありました。おどけた恰好の当番長も、「よし、行かう！」と云つて、太つちよの短い体を、前へ躍り出しました。

「ぢや、君たち五年生から行つてくれ給へ。僕たちは、そのあとだ。」と、槇君が云ひました。

五年の当番は六人でした。みんなニコ〳〵して、元気に、四年の当番の前を出て行きます。と、その中の一人が、

「ぢや、かへすよ、ぞうきん。」と云つて、ポイと、持つてたぞうきんを投げ返しました。取つてたぞうきんです。

「オーライ！」と答へて、それをすぐ四年生の一人が、ヒヨイと引つ掴(つか)みました。

「ナイス〳〵！」

みんな、すつかり仲好しになつて、ガヤ〳〵と、六年生男子組の教室へ入つて行きました。

「君たち、おーい、おれたちのぞうきんどうしたい？　かへしてくれよう。」

五年の当番長は、教室に入ると、ブツキラボウに云ひました。

六年男子組の当番は七人でしたが、十三人も一度に押入つて来たので、ちよつと、あつけにとられました。特に当番長の下田(しもだ)といふ少年は、自分が優等生だけに、ひどくあわてました。こんな騒ぎを先生にでも見つかつたら、どんなに叱(しか)られるだらうと思つたからです。で、すぐぞうきんを返さうと思つて、

「おい、誰が持つてるんだい？　すぐ返せよ。」と、青い顔をして云ひました。

「知らねえよ。」と一人の男の子が、意地悪さうに答へました。

「おれも知らんぞウ。」と、また一人答へました。鼠(ねずみ)でも引いてつたんだらう、チユウ〳〵つてな。」

「馬鹿にするな！」と、突然五年生の一人が叫びました。
つゞいて、五年生たちみんなが、口々にくツてかゝりました。
「鼠はおまいたちだらう！」
「ぞうきんをかへせ！」
「六年生でもひつぱたくぞ！」
「もう一度云つて見ろ！」
「おい〳〵、さわぐな。」と五年の当番長が、短い太つちよの体を、もぐらのやうにモグ〳〵動かして云ひました。
すると、今度は六年生の方が、口々にくツてかゝりました。
「なんだ、もう一度云つて見ろ！　下級生のくせに、なまいきだ！」
「おまいの方の当番長はもぐらぢや！」
「大勢で来やがつて——四年生迄(まで)つれて来やがつて——いくぢなし！」
「なんだと？」と五年生の一人が、向つ腹を立てゝ躍り出ました。すると、
「やかましく云ふな。ぞうきんなら、こゝにあらあ。」
と云つて、向ふからボテリと、足もとにぞうきんを投げ返しました。
「投げ返すやつがあるかツ！」
「ぢや、どうしろツてんだ？」

「返すやうにして返すんだ。」

「ぢや、なにかい、お盆か何かへのつけてさ、『はい、どうも有難うさま』つて、さうして返せば気に入るんかい？　さうだな？　アハツハツハア！」

「さうだとも！」

「アハハハア！」

誰か一人、バカに調子はづれの大声で笑つたので、つい二三人引きずりこまれて笑つてしまひました。さうすると、すぐ四年生たちが笑ひ出し、たうとう、みんなドツと笑つてしまひました。

そして、暫くみんな笑ひつゞけた後に、やつとお互ひに顔を見合つた時には、もう誰一人も、おこつた顔をしてゐる者は、ありませんでした。みんなニヤ〳〵ツとしてゐました。

「ねえ、おい！」と、この時、槇君が前へ出て云ひました。

「ねえ！　みんな、仲よくしようよ。僕たちもね、さつき、この五年生の組に、ぞうきんを一枚とられたんだ、だが、もう返してもらつて、仲直りしたんだ。だがねえ、こんなふうに、ぞうきんの取り合ひごつこをするのも、もとは、どこにもボロぞうきんしかないからぢやないかな？　僕んとこなんかにや、みんなで五つあるんだけど、ほんとうは三つ分ぐらゐしかないや。だからね、みんなで、かうしようぢやないか？」

さう云つて、槇君はみんなの顔を見廻しました。みんな熱心に聞いてゐます。

そこで槇君は、唾をのみこんで、また続けました。

「あのねえ、かうしたらどうだらう？　四年生以上の組には、どの組にだつて『クラス自治会』があるね。そこへぞうきんのことを持ち出して、ボロになつたら、すぐ新しいのを、学校から出してもらふことにしたらどうだらう？　さうするとぞうきんの取り合ひごつこもなくなるし、掃除だつてすぐ出来て、きれいに出来上ると思ふんだがな。どうだらう」

「うまい〳〵、さんせい！」と、五年の当番長が、おどけた恰好で手を叩いて叫びました。

「四年の当番長は頭がいゝや！」

みんな笑ひながら手を叩きました。

「さんせい！」

「みんな賛成だア！」

すると、さつきまで青い顔をして、ひどく困つたらしい様子をしてゐた六年の当番長の下田君が、すつと立ち上つて、

「今の意見は、大へんいゝ意見だと思ひます。僕も大賛成です。で僕は、この次の土曜の、僕たちのクラス自治会にかけて、ぜひ、さう決めたいと思ひます。君たちも、君たちのクラス自治会にかけて、早くさう決めて下さい。」と云ひました。

みんな、元気よく、パチ〳〵と手を叩きました。と、その途端、トン・トトンと、つゞけさまに三つ、みんなの突つ立つてゐる頭の上の天井が鳴りました。忽ちワアツと、みんな騒ぎ立

ちました。ふり仰いで見ると、ボロの濡れぞうきんが投げられて、天井に突き当たつて落ちて来るところでした。

みんなは、またワツと叫んで、パチ〳〵と手をうち鳴らしました。

「おい〳〵、ぢやア、さうすることにして、みんな引きあげようぜ。」

やがて、五年の当番長がかう云ひました。ぞうきんを投げたチビの北川君を一番先に、みんなガヤ〳〵と出て行きました。

「おほけに、おぢやまさま。」

「おやかましうございました。」

出て行く子供たちがそんなことを云ふと、見送る子供たちの方でもこんなことを云ひました。

「どうか、またお出で下さい。」

「なにも、おかまひしませんで。」

「アバヨ！」

「ちよつと君、早かつたら待つとつてね。一しよに帰らうよ。」

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　三〇巻」ほるぷ出版
　　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「仔猫の裁判」文章閣
　　1935（昭和10）年11月
初出：「教育論叢」
　　1933（昭和8）年7月
入力：菅野朋子
校正：雪森
2014年6月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

掃除当番

槇本楠郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/